



# 15のいす

## いすのつぶやき

最高裁判所判事

才口千晴

私は、最高裁判所大法廷のいすである。

1974（昭和49）年3月、千代田区隼町生まれ、身長1メートル50センチ、体重38キログラム、サクラ材・本革張りで、今年満32才になった。

1947（昭和22）年5月3日に最高裁

判所が誕生してからすでに145人

の判事さんが任命され、新庁舎のいすに座られた判事さんも100人になろうとしている。

産みの親である岡田新一博士の大法廷の設計イメージは“森の木漏れ日の中での厳粛な裁判”にあったと聞いている。高いドームには威厳があるが、壁に掛けられた太陽と月を表すタペストリーが法廷の雰囲気や和らげている。

いすにお座りになる判事さんの経歴は裁判官、外交官、行政官、学者、検察官、弁護士など歴代さまざまであり、その道で熟達された平均64才位の方々が定年の70才まで黒羽二重の法服をまとって座られる。

大法廷の弁論や判決までには十分な評議が重ねられているとのことであるが、15人の判

事さんたちはお年の割りにはお元気であり、肅々と法廷に臨まれているのでいつも感心する。途中で健康をそこなわれ、定年まではお座りになれなかった方のことを思い出すと心が痛む。



最近では、お座りになる回数が多いようで、去年から今年にかけては、10回近くも座られた。外国人の管理職公務員資格、在外邦人の選挙権、行政訴訟の当事者適格、国民健康保険料の負担、参議院議員の定数配分規定の問題などの事件の弁論や判決においてである。

3年後の2009（平成21）年5月までには、裁判員裁判という新しい制度が発足するとのことであり、

最近では法廷見学の人も多く、裁判所や裁判のことが大分国民に理解されてきたような感じである。

これからも人権の擁護や社会正義を実現し、この国のかたちや道筋を見誤らないように、多くの判事さんが安心して座っていただけるよう務めるつもりである。